

紙芝居台詞第 2 稿

	表紙
	この紙芝居は、平和で静かな海辺の村に原子力発電所（原発）を建てることから始まります。村はどのように変わったのでしょうか。
	1 枚目
村長	<p>ここは日本のある海辺の村です。住んでいる人は少なく、みな畑や魚をとる仕事をして暮らしています。ある時原発の建設計画が持ち上がりました。建設予定地は村のはずれ、森の奥のだれも住んでいないところです。</p> <p>（◎村長が村人達に胸を張って演説をしている感じを出す。）</p> <p>村長さんが言いました。</p> <p>「みなさん。この村に原発を建設しないかね。働く場所も収入も増えるし、若者が都会に出ていかんでも村で働けるようになる。たくさんのお金が入って、村はもっと豊かになるそうじゃよ。」</p> <p>（◎興味を持たせるために、どの辺に原発が作られるかを予想させるのも一つの方法です。）</p>
	2 枚目
おじいさん	<p>1 回目の原発説明会が開かれ、村人たちは村がどうなるのか不安な気持ちで説明を聞きに来ました。</p> <p>（◎村人たちは原発とはどんなものかよく分かっていない状況。安全性への不安や、本当に村が活性化するのか疑問を持っている）</p> <p>おじいさんが心配そうに話しました。</p> <p>「原発って本当に安全なのか？放射能っておそろしいものではないのか？」</p>
おばさん	<p>おばさんも言いました。</p> <p>「本当に仕事は増えて若者は帰ってくるの？たくさんのお金が入って村は豊かになるのかしら？」</p>
お母さん	<p>お母さんが言いました。</p> <p>「私は今のままでいいけどねぇ。」</p>
電力会社の担当者	<p>電力会社の担当者が説明します。</p> <p>「原発は安心です。働く所も増えるし、お金も入る。町はきれいにもっと便利になりますよ。」</p>
漁業の村人	<p>漁業をしている村人が質問します。</p> <p>「漁業ができなくなるというのは本当ですか？」</p>
電力会社の担当者	<p>担当者が答えます。</p> <p>「はい。それはほんとうです。しかしその分の補償はいたします。大丈夫です、たくさんのお金をお支払いしますよ。」</p> <p>村人たちは、お金が入る、働くところはできる、安全だということなので一安心しました。でもまだ原発がどんなものなのか、不安を抱えています。</p>
	3 枚目
担当者	<p>2 回目の原発説明会が開かれ、国の役人が原発をつくる予定の土地の調査結果を説明しています。</p> <p>「土地の調査結果から、原発の建設予定地は地盤が固く安全であることがわかりました。もし地震が起きてしまっても、発電所は震度 7 まで耐えられます。」</p>
村人	<p>村人が質問します。</p> <p>「原発が爆発する恐れはないのかね？」</p>
担当者	<p>担当者が答えます。</p> <p>「爆発するようなことは絶対にありません。原発は五重の壁に守られていて、万全な安</p>

反対派の人	全対策をしています。大きな事故が起こることはありません。信頼してください。」
担当者	しかし原発の建設に反対する人々もいます。 「うそだ！原発は危険だ！原発はいらない！」
村人	それを聞いた役人はこう答えました。 「ご心配なのはわかりますが、設計上も安全性について問題はありません。」 こうして反対する人々の意見は取り上げられませんでした。 「でも本当に安全なのかな。」
	4 枚目
電力会社社長	数年かけて原発が完成し、様々な関係者が集まって祝賀会が行われています。 (◎完成を祝い、喜びに満ちた気持ちで言葉を交わす)
村長	すると電力会社の社長さんはこう言いました。 「村長さん、本当にお世話になりました。土地の買い付けなども順調に進めて頂き感謝しています。村の発展のためにこれからもできるだけ支援していきますね。」 それを聞いた村長さんは笑顔で嬉しそうに答えました。 「ありがとうございます。原発は安全安心が第一です。しっかりおねがいしますよ。」 海辺村のキャッチフレーズは『新しいエネルギーと歩む村』です。きっと明るい未来がまっているに違いないでしょう。会場に招待されている人々はみんな喜んでいます。しかし、本当によいことばかりなのでしょうか。
	5 枚目
おじさん	原発ができて村は大きく変わりました。 (◎村人によって立場が異なることを意識して話す。おじさんと子どもを抱いたお母さんは原発ができて恩恵を受けた人。おばあさんとおじさんは原発ができてあまり変わらない人。)
おかあさん	おじさんが言いました。 「うちの会社は仕事が増えて儲かったよ。村にもお金が入って活気が出てきたよ。」
おばあさん	こどもを抱いたお母さんが言いました。 「道路も新しく広くなったので、町に行くのも便利になりました。」
おじいさん	おばあさんが言いました。 「私はそんなに変わらないなあ。新しく建てられた体育館とかはそんなに使わないのに大きすぎるよ。電気代や掃除するお金がかかってもったいないんじゃないの。」
	おじいさんが言いました。 「お金がたくさん入った人もいれば、何も変わらない人もいる。不公平じゃないかなあ。」 原発ができて、生活がよくなった人もいましたが、ほとんど変わらない人もいたのです。 (◎次の紙芝居は最初に半分だけ引いて、もう半分は隠しておく。)
	6 枚目
作業員A	(◎紙芝居は左手に半分だけ引く。原発館内内の配管の修理をしている場面である。)ある日のことです。 (◎慌てている様子をだすために、緊迫感をこめて強い口調で話す。)
作業員A	原発で働く人が慌てています。 「大変だ！放射能が漏れた！様子をみてこい！」 放射能を含んだ水がパイプから漏れてしまったようです。水漏れから大きな事故になるかもしれません。放射能は人間にとって危険なものです。作業員は放射能から身を守る防護服を着て必死に配管を直しています。 プープーパー、プープーパー 作業員は必死です。 「これ以上水が漏れないようにするんだ。」

<p>作業員B 作業員A</p>	<p>プープー、プープー もう一人の作業員も真剣な表情です。 「とまりません。どうしよう。」 「落ち着け！なんとかして水を止めるんだ！」 カンカンカン、コンコンコン (◎間を開けて読む。)</p>
<p>作業員B</p>	<p>作業員から安堵の声が聞こえてきました。 「ふー、よかった。水漏れが止まったぞ。」 (◎ここで、左手の方から紙芝居をすべて引く。中央制御室での様子に変わる) 中央制御室にいる電力会社の職員も緊張しています。青ざめた顔です。 (◎水漏れが止まったことに安心したので、ゆっくりと落ち着いて話す。)</p>
<p>職員A</p>	<p>職員が言いました。 「やれやれ、やっと止まったか。どうなることかと思ったよ。」 もう一人の別の職員も言いました。</p>
<p>職員B</p>	<p>「よかったなあ。放射能を含んだ汚染水があのまま止まらなかったら、取り返しの付かない大事故になるところだった。」</p>
<p>職員A</p>	<p>職員は、困った顔で言いました。 「さてどうしよう。あれだけ安全だと言っているから、村人たちを心配させないように報告しないといけないなあ。」 あれ、原発は安全なはずだったのではないのでしょうか？放射能が原発の外に漏れれば住んでいる人みんなの健康によくありません。村人たちの健康や生活は、そして村の植物や動物は大丈夫なののでしょうか？</p>
	<p>7枚目</p>
<p>子ども お父さん お母さん 子ども</p>	<p>(◎描かれている家庭には、どんな電気製品があるのかを質問することで、家にはたくさん の電気製品があることを意識させることもできる。) さて、ところ変わってここは東京です。 ある家庭では、幸せそうな家族が晩ご飯を食べています。でも誰もいない部屋の電気は つけっぱなし、ポットやテレビなどの家電製品のスイッチは入ったままになっています。 子どもが言いました。 「ねえねえ。お父さん。今日学校で電気の勉強したんだよ。電気は遠くの原子力発電所 からきているんだって。」 お父さんは 「そうか、電気のことあまり考えたことがなかったなあ。どんな事を習ったんだい？」 と、言いました。 しかしお母さんは 「電気のことよりも、宿題はちゃんと終わったの？きちんと終わらせてから寝るのよ。」 と答えました。 子どもは、つまらなそうに 「わかってるよ。せつかく電気のことを習ったからお父さんとお母さんに聞かせてあげ ようと思ったのになあ。」 と、言いました。 部屋の照明やテレビ、そして調理器具、エアコンと、都会では電力がどんどん使われて いきます。窓の外には送電線が見えます。この送電線は海辺村につながっています。海 辺村の原発で作られた電力が、今こうして都会で使われているのです。都会の人たちは そのことを知っているのでしょうか。</p>